

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22530720

研究課題名(和文) 不登校経験者への進路指導と卒業後に求められる支援 - ひきこもり防止の観点を加えて

研究課題名(英文) The guidance counseling for school refusals and the support required after graduation - the viewpoint of social withdrawal prevention

研究代表者

伊藤 美奈子 (ITO, Minako)

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：20278310

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)： 昨今、不登校を受け入れる新しいタイプの高等学校が急増しており、中学校で不登校を経験したものの進路は多様化しつつある。しかし、この不登校経験者の多様な進学先における予後については調査実施の難しさもあり、大規模な調査は十分には行われていない。そこで本研究では、不登校経験者の「予後」や、不登校を支援する専門機関での対応に焦点つけて、不登校経験者が多く通う通信制高校で大規模調査を実施した。その結果、不登校を経験した生徒たちの予後が、その生徒が自分にあった高校につながった場合には、自分の過去を受け入れ、さらには未来にも明るい展望を持つことができているという現状を確認することができた。

研究成果の概要(英文)： Recently, the new high school to which many truants go is increasing rapidly, as a result, the course of the student who became school refusal in the junior high school has spread variously. However, about the prognosis of the school refusal students, it is difficult to investigate. Therefore, large-scale investigation is not fully conducted. In this research, I observed the "prognosis" of the person who became school refusal in junior high school. Furthermore, in order to clarify correspondence in the specialized agency which supports school refusal students, I investigated at the communication system high school to which school refusal students go. As a result, when the students who experienced school refusal were connected with a high school suitable for themselves, and it turned out that its past is acceptable.

研究分野：臨床心理学

キーワード：不登校 中学卒業後 通信制高校

1. 研究開始当初の背景

文部科学省「不登校問題に関する調査研究協力者会議」(2003)において、不登校支援の最終目標は「社会的自立」にあることが確認された。しかし義務教育終了後は、公的な不登校支援の場が格段に少なくなる。また、不登校経験者の一部が中学卒業後、学校にも職場にもつながらず「社会的自立」の機会を失った状態にあるのもまた事実である。このように義務教育終了後の不登校支援について十分な方策が採られないまま、ひきこもりやニートなど社会問題との関連が指摘されることも多い。これらの実践や研究を通して、不登校生徒への進路指導は個々の担任教員が悩みながら行っているのが現場の実態であり、義務教育終了後にはさらに支援が手薄になるという課題も見えてきた。とくに昨今、フリーターやニートが問題視される風潮の中、義務教育期間後の不登校への対応とその「予後」に注目が寄せられているが、これまで不登校の長期的な追跡研究については精神医学における予後調査(門, 1994; 大高ほか, 1986; 渡辺, 1983 など)が主であった。これら医療現場における追跡研究をレビューした齊藤(2000)は、不登校の予後について「数年以上の長い経過で見ると不登校の子どもの70~80%は社会的に良好な適応を示すようになるが、20~30%ほどは社会的適応の難しい不安定な状態にとどまるものがある」という大まかな見込みを示している。

不登校経験者は、不登校の後、どのような出会いや経験をしているのであろうか。先の調査結果(森田, 2003)によると、就学も就労もしなかった者に比して、仕事であれ学校であれ、社会的な所属先を有するものの方が自らの出会いや経験を評価しそれが生きる自信にまでつながっていることがわかる。しかし、卒業後、学校にも仕事にも所属しなかった生徒の中には、その後も自分の居場所を見つけれずにいる者の割合が高くなる。仕

事、学校を問わず、社会とのつながりの糸(social bond)を結ぶことの大切さを示唆する結果である。以上のように、中学校時代に不登校であった子どもたちがその後何らかの“所属”につながるかどうかは、その後の生き方を予想する上で重要な観点になると考えられる。

2. 研究の目的

そこで本研究では、中学卒業後のさまざまな進路についての実態を踏まえつつ、定時制高校や通信制高校、サポート校や高等専修学校を対象にした大規模調査を実施する。第一に、義務教育の終点に当たる中学校卒業を前に、不登校生徒に対しどのような進路指導が行われているのかを明らかにすると同時に、不登校の進路に関する中学校教師の意識についても調べる。第二として、義務教育である中学を卒業した不登校生徒たちが、その後のどのような進路を選択し、どんな予後(適応や定着の過程)をたどるのかを調べ、不登校経験者の<過去><現在><未来>を明らかにする。さらに第三としては、現在ひきこもり傾向にある不登校経験者の「中学卒業からの経過」を聞き取り調査することで、「社会的自立」を促進する要因、阻害する要因を探る。そして第四としては、社会性の未熟さやコミュニケーションの不得手さを指摘される不登校経験者への支援が、中学卒業後の進路先でどのように実施され効果をあげているのかについて、現場教師との協働により支援プログラムを開発しその効果測定を行うことを目的に掲げる。

「不登校だった子どもにとって中学校卒業時の進路は社会適応という点でまだ非常に流動的なものであり、長期予後との関連が薄い」(齊藤, 2000)といわれている。不登校を広く「生き方の問題」としてとらえるならば、10~20年というスパンでの長期的な追跡研究が必要となる。しかし、岩元(1996)

によると、再登校や学校適応という因子がその予後を予測し長期的な治療指針として有効であるとの指摘もある。とりわけ支援の場が少ない高校段階における不登校経験者の「その後」については、まだまだ明らかになっていないことも多い。そこで本研究期間では、中学校卒業後の進学先の一つであるチャレンジ校に限定し、その時点での不登校の予後について検討する。

3. 研究の方法

調査時期 2012年4月。

調査対象 不登校経験者や中途退学者が高校生活を送れることを目指して新しいタイプの高校として開設されたチャレンジ校の一つであるA高校に在籍する生徒。男子116人、女子279人、不明3人。学年別に見ると、1年生133人、2年生120人、3年生93人、4年生51人、不明1人であった。全体の平均年齢は、16.4(SD=1.59)歳であった。

調査方法 ホームルームなどを利用し、担任教師から配布・説明が行われ、回答を求めた。本人の了承が得られた場合のみ回答を求め、回答の途中でも回答を拒否することができる旨、担任教師から説明がなされた。

調査内容 自尊感情尺度(東京都版)22項目。中学校時についての学校適応尺度10項目。学校生活欲求尺度：学校生活にどの程度欲求を持っているかについて尋ねる大久保(2010)より21項目。不登校傾向を示す尺度。不登校に関心のある大学院生、高校教師、大学教員などにより抽出された15項目。将来展望に関する尺度(都筑,2009)。将来についてどれくらい意識を持っているかを測る22項目。これら以外に、中学の欠席状況、高校入学動機、現在の欠席状況、勉強の理解度、高校を辞めたい願望の有無、将来の進路について(「4年生大学」「短大」「専門学校」「就職」「フリーター」「未定」から選択)、現在の不登校への認識(「今の自分にプラスだったと思う」「今の自分にマイナス

だったと思う」「どちらともいえない」より選択)。

4. 研究成果

中学校時代に不登校を経験した高校生に注目し、その<現在><過去><未来>について検討を行う。まず、中学校時に、不登校を経験した生徒と、経験しなかった生徒を比較してみると、不登校を経験した群は、中学校時代の学校適応のうち<友人関係>と<進路意識>で低く、また、不登校の素地となる<不登校促進>の得点も高いことが示された。しかし、自尊感情3得点には有意な差は見られなかった。中学校時代に不登校をしていたために、中学校時代は友人関係が十分に築けず、進路意識にも前向きではなかったと考えられる。また、その過去の経験の影響が、現在も不登校への親和性(学校に対する拒否意識)は強い。しかし、前向きな動機で入学を志願した高校に入った現時点における自尊感情には差は見られない。これより、中学校時代の不登校経験という「過去」が、そのまま「現在」の自尊感情を規定するとはいえないことがわかる。

では、不登校経験者は、高校に入学した現在、不登校という「過去」をどうとらえているのであろうか。その回答は先行研究(森田,2003)とも共通して、プラスととらえるか、マイナスとみるか、どちらともいえないと考えるかについては三分される。このように「過去」をどのようにとらえるかは、「現在」のあり方が影響していると考えため、次に、不登校への捉え方により分類した3群と登校群との4群で、各得点の違いを比べた。その結果、不登校群と登校群間の差より、不登校3群の間の差異の方が大きいことが明らかになった。まず、自尊感情は3得点とも、最も高いのは不登校プラス群、最も低いのは不登校マイナス群となり、登校群と不登校どちらでもない群とは、その中間に位置するこ

とがわかる。一方、中学校時代の学校適応は、やはり友人関係については登校群と不登校3群との間に意味のある差が見いだされる一方で、勉強に関しては、不登校プラス群が最も高いことも示された。さらに、不登校への親和性を意味する不登校促進得点は、登校群と不登校3群との間に差が見られた一方で、登校への意欲（登校促進）については、不登校プラス群が最も高いことが見いだされた。このように、中学校での友人関係や不登校への親和性は、やはり不登校経験の有無で違いが見られるが、勉強への意欲や登校への意欲については、不登校プラス群のほうが良好である。また、将来展望のうち「将来への自信」を意味する得点で、不登校プラス群が最も高く、登校群が最も低いという結果になった。

以上より、不登校を経験した生徒のうち、それをプラスにとらえている生徒（不登校プラス群）は、現在の自尊感情は3得点とも高く、中学校時代に勉強への意欲があると同時に、現在も登校意欲を持っている。さらに、将来に対しても自信を抱き、具体的な進路希望においても前向きな希望を持っているものが多い。その対極にあるのが不登校マイナス群であることがわかる。

これらの結果をふまえると、中学校時代の不登校経験の有無による差は、不登校であった中学校生活に関するものや不登校そのものに直結する得点以外ではほとんど見られなかった。つまり、中学校時代に不登校であったかなかったが、直接、その後の適応を決めるとはいえないことが確認された。他方、過去の不登校歴をどのようにとらえているかという要素で分析を加えた結果、自尊感情3得点がともに高かったのが不登校プラス群であり、この不登校プラス群は勉強や登校への意欲も高く、高校入学動機も前向きであっただけでなく、将来への自信や具体的な進路選択においても前向きな特徴を持つこと

が示された。これより、「現在」に自信を持ち「過去」をプラスに捉え直すことができているものは、「将来」に対しても明るい展望を抱くことができるということがうかがえた。

また、この研究以外にも、中学での進路指導に焦点づけた調査や、不登校の支援機関（フリースクール）での子どもたちの変化に関する調査を実施し、不登校支援が、義務教育段階だけでなく高校段階においても必要であること、また学校現場だけでなく、相談・支援機関での取り組みにおいてもさらなる検討が必要であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 23件)

伊藤美奈子、「教師・カウンセラー・保護者の協働による不登校への対応」, 教育と医学, 査読無, 58(11), 2010, 39-45.

伊藤美奈子、「不登校の実態×生徒指導提要」, 教職課程, 査読無 37(1), 2011, 32-33.

伊藤美奈子、「教師の燃え尽きとうつについて」 子ども心の学校臨床(遠見書房), 査読無, 4, 2011, 43-50.

伊藤美奈子、「不登校と、その背景にある家庭」, 中野区教育委員会指導室報告書・査読無, 2011, P.4.

伊藤美奈子、「児童の自尊感情を育む学校経営」, 教職研修, 査読無, 2011年3月号, 28-31.

伊藤美奈子、「不登校・スクールカウンセリングと面接技法」, 臨床心理学, 査読無, 62, 2011, 205-209.

伊藤美奈子、「関係性の病理といじめ」, 現代のエスプリ, 査読無, 525, 2011, 42-51.

伊藤美奈子、「不登校は今どうなっているか」, 児童心理, 査読無, 933, 2011, 1-10.

伊藤美奈子、「教員との関係をどう創るか」, 村山正治・森岡正芳編 臨床心理学, 査読無,

増刊第 3 号,『スクールカウンセリング - 経験知・実践知とローカリティ』, 金剛出版, 2011, 77-80.

伊藤美奈子,「新たな不登校を生まない未然防止の取組」,教職課程,査読無,38(16), 2012, 26-29.

伊藤美奈子,「自尊感情によるタイプ分類の試み - 3 因子の組み合わせによる 8 タイプの分類」,慶應義塾大学教職課程センター年報,査読無,20,2012,95-112.

伊藤美奈子・ザイ宇華,「中学生・高校生の自尊感情に関する日中比較」慶應義塾大学教職課程センター年報,査読無,20,2012,129-142.

伊藤美奈子,「不登校経験者の「過去」「現在」「未来」 - チャレンジ高校に在籍する生徒を対象とした調査より - 」,慶應義塾大学教職課程センター年報,査読無,20,2012,113-128.

伊藤美奈子,「やる気の土台としての自尊感情」,児童心理,査読無,961,2013,24-28.

伊藤美奈子・小澤昌之・安田崇子・星野千恵子・福智直美・近兼路子・原聡・鶴岡舞,「不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連 - 通信制高校に通う生徒を対象とした調査から - 」,慶應義塾大学大学院社会学研究紀要,査読無,75,2013,15-30.

伊藤美奈子,「臨床活動から研究へ」,臨床心理学,査読無,75,2013,375-379.

伊藤美奈子,「教員へのコンサルテーション」,臨床心理学(増刊 5 号),査読無,2013,204-207.

伊藤美奈子,「反抗期がない子」を考える」,児童心理,査読無,971,2013,48-53.

伊藤美奈子,「新しいスクールカウンセリングのパラダイム」臨床心理学,査読無,77(第13巻第5号),2013,605-608.

伊藤美奈子,「人格形成および学校臨床に関する研究を振り返って」,家政学研究,査読無,60(1),2014,16-23.

②1伊藤美奈子・小澤昌之,「児童生徒の自尊感情を規定する要因-規範意識と家庭を取り巻く環境に着目して-」,奈良女子大学心理臨床研究,査読無,1,2014,19-25.

②2伊藤美奈子・小澤昌之,「児童生徒における生活習慣と相談ネットワークに関する考察」奈良女子大学心理臨床研究,査読無,1,2014,31-42.

②3伊藤美奈子,「自尊感情が低い子どもたち - 自己否定感をもたらすものは何か?」児童心理,986,2014,42-46.

〔学会発表〕(計 8 件)

伊藤美奈子,「不登校経験者の「過去」「現在」「未来」」,日本心理学会第 76 回大会,2012,専修大学

伊藤美奈子,「不登校タイプにより過去の支援や不登校に対する評価は異なるか? - こもることの意味を考える - 」,日本ヒューマン・ケア心理学会第 15 回大会,2013,聖路加看護大学

伊藤美奈子,「高校生の不登校経験に対する評価 - 不登校による得たもの・失ったものに焦点付けて」,日本教育心理学会第 55 回総会,2013,法政大学

伊藤美奈子,「いじめ経験のタイプによる自尊感情の比較」日本心理学会第 78 回大会,2014,同志社大学

伊藤美奈子・ザイ宇華,「自尊感情と学校享受感に関する日中比較 - 東京都版自尊感情尺度を使って - 」,日本教育心理学会第 56 回総会,2014,神戸国際会議場

ザイ宇華・伊藤美奈子,「中国の中高生の自尊感情が学校享受感に与える影響に関する調査 - 東京都版自尊感情尺度を使って - 」,日本教育心理学会第 56 回総会,2014,神戸国際会議場

金子恵美子・大橋節子・伊藤美奈子,「パフォーマンス活動が高校生の学校生活への適応に及ぼす影響 - 通信制 K 高校の実践から - 」,日本教育心理学会第 56 回総会,2014,

神戸国際会議場

大橋節子・金子恵美子・伊藤美奈子,「不登校経験のある高校生の学校適応とパフォーマンス活動の関連について - 通信制 K 高校の実践から - 」,日本教育心理学会第 56 回総会,2014,神戸国際会議場

〔図書〕(計 6 件)

伊藤美奈子,「児童生徒の理解」「児童生徒理解の方法」「児童生徒アセスメントの課題」「不登校」,小泉令三編『よくわかる生徒指導・進路指導』,ミネルヴァ書房, Pp.64-75, 2010, 118-121.

伊藤美奈子,「個人差と不適応への対応」,三宮真智子編『教育心理学』,学文社,2010, Pp.100-115.

伊藤美奈子,「第三の役割:教師カウンセラー」,上地安昭編『教師カウンセラー・実践ハンドブック』,金子書房,2010, Pp.28.

伊藤美奈子,「不登校・学級集団の逸脱への支援」 無藤隆・長崎勤編『発達科学ハンドブック 6 発達と支援』,新曜社,2012, Pp.121-129

伊藤美奈子,「教育とカウンセリング」,安藤寿康・鹿毛雅治編『教育心理学 - 教育の科学的解明をめざして』,慶應義塾大学出版会,2013, Pp.277-293.

伊藤美奈子,「不登校」,後藤宗理ほか編『新・青年心理学ハンドブック』,福村出版,2014, Pp.478-487.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:

権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 美奈子 (ITO, Minako)
奈良女子大学・生活環境科学系・教授
研究者番号:20278310

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

相馬 誠一 (SOMA, Seiichi)
東京家政大学・人文学部・教授
研究者番号:20299861